



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.150
2016.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第8回 ● 椎塚貝塚の加曾利B式

初学者が加曾利B式土器片を同定するためには一定の訓練を必要とするが、西ヶ原貝塚報告こそが模範的な実践訓練である。近年では1980年の大森貝塚報告や1981年の中妻貝塚報告の分類が坪井正五郎の方針を踏襲しつつも、より正確さを求めている。西ヶ原貝塚は正に本草学の薫陶を受けた分類の指導方針であり、日本の石器時代研究は土器でも坪井正五郎が牽引した。

では、西ヶ原貝塚報告が(未完)のまま終了したのは何故であろうか? この時期の動向は山内清男が「明治考古学秘史」でも注目しており、モース時代に「大森式と陸平式とに区分した」「土器区分」の復活を回避させるためと思われる。

学史的には「類似の形態連繫論」VS「相異の土器区分論」という形態学進化の時代に入り、層位学適用以前に人類学教室が果たした役割は大きい。逆転年代説から鳥居竜蔵の「同時代異部族説」へと展開する学史の要は、次に触れる坪井正五郎の「土器区分」回避の視点に学ぶべきで、新たな社会論的研究が展望される。

「土器様式名称」推奨に不利な点は分類項目の構成決定方法であり、「優生学」的選択を用いた手続きの複雑化は間違いなく阻害要因である。個体に観る比較分類の質的な直感問題とは異なり、全量を分類対象にする量的多寡の抽出・選択と組み合わせを求める方法は、「土器様式名称」の決定方法としては煩雑この上ない。それ故に人類学教室員には他人事として感心するのみで普及には至らないば

かりか、土器片分類による数量化研究からも関心が離れてしまう。

次に「類似の形態連繫論」にとり衝撃的な動向の端緒は、西ヶ原貝塚連載中に行われた椎塚貝塚の成果報告であろう。モースは大森貝塚を発見・発掘・報告したが、坪井正五郎発掘の西ヶ原貝塚は既に好事家などには良く知られた存在で、モースの学術的発見性と比して見劣りするであろう。

そこで当時の坪井正五郎は東京湾以外にも貝塚や土器出所等石器時代遺跡の調査を進め、常南総北では自身の調査で新たに多数の貝塚等を発見する。取り分け椎塚貝塚等を有望視し、西ヶ原貝塚報告(明治26年4月から明治27年)開始と略同時に八木奨三郎・下村三四吉を椎塚貝塚に派遣し発掘の上、直ちに成果を報告(明治26年6月)させる。

山内清男は「茨城県遺蹟の役割」で兩名の報告を「大森その他のものと比較しつつ、土器の各形態、底部の性状、土製品、骨角器、石器等を詳述し、図表多数を加えている」と紹介し、特に土器と土偶に

観る他遺蹟との比較検討は今日でも加曾利B式研究にとり重要である。紙面の都合で詳細は省略に従うが、椎塚貝塚からは39個体(第11図)の完形あるいは準ずる種々な形態の土器が出土し、その全体性に対しては山内清男もキャプションで「加曾利B式」と明示する程である。「モースの大森貝塚は約20個」に比して優位となり、鳥居竜蔵が語る標本剥がし事件との関係でも注目に値しよう。

加曾利B式の本体は学史を越れば大森貝塚ではなく、椎塚貝塚の39個体を構成する年代と系統である。兩名の解説に観る類似の個体比較姿勢は西ヶ原貝塚と共通の方針であり、以後、椎塚貝塚が加曾利B式の基本的な枠組みとなる。兩名が指摘した「本貝塚土器二八把手ノ類至ッテ少ナキ」、あるいは「把手類八其数極メテ少ナシ」という椎塚貝塚の特徴の一部、及び僅少な把手には「大森貝塚所出ノモノニ類セリ」との類似を確認した上で、椎塚貝塚と大森貝塚との系列差に着目した型式学の展開は、1980年の大森貝塚報告まで俟たなければならない。



▲第11図 椎塚貝塚の加曾利B式

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■加曾利B式土器 椎塚貝塚の加曾利B式(第8回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第1回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイスバレット・サイト(第143回) 富樫秀之 …2
■考古学者の書棚 「城の内 信州千曲河岸の土師式集落遺跡の研究」平林大樹 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第1回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

1.瀬戸内海の小島でシジミ(上)

太平洋戦争が終わって間もないころ、瀬戸内海の中東部に南面した岡山県の考古学は、邑久郡牛窓町(現瀬戸内市)の黄島貝塚の発掘から始まった。淡路島の西に広がる播磨灘の西北部、香川県小豆島の北方の海面に浮かぶ小島の貝塚である。立命館歴史地理研究室の藤岡謙二郎、慶応の江坂輝弥、後に同志社の教授となった東大の酒詰仲男、広島県府中高校の豊元国、地元岡山の鎌木義昌らの各氏が相次いで発掘した。1947～8年のころであった。黄島の西2.5キロメートルの小島、黒島の貝塚と共に戦前・戦中から縄文早期押型文土器を出す貝塚として知られていた。

当時、さほど広くもない黄島貝塚に多くの研究者が目をむけたのは、全国的に最も古い文化を探求しようとしていた気運によるものだったのであろう。戦後の経済的にも不安定なころのことであるから、それぞれの調査は小規模なものであったが、戦争から解放され、神話に基づく歴史観から自由になった時代を象徴するような調査であった。1949年に群馬県岩宿遺跡が発掘調査される少し前のことである。

黄島貝塚も黒島貝塚も、本土の陸地からは離れた孤島の南面した台地上にあり、海面との間は海蝕による断崖となって、海拔高は30メートルばかりとなっている。黄島貝塚はハイガイとヤマトシジミ、黒島貝塚はヤマトシジミを主とする貝塚であるが、現在の周辺海域は、浅海・泥海産のハイガイや汽水産のヤマトシジミが採取出来る環境にはない。付近が海進途上にあつて、海水面が現在よりもかなり低かった時代の貝塚と推定されることも調査の対象として選ばれた理由であったようである。

余談だが、戦後にミシガン大学の日本研究所が岡山にでき、その研究員が、炭素14年代測定を試料として鎌木氏発掘の黄島貝塚の貝を同大へ送付、同じころ明治大学調査の神奈川県夏島貝塚の試料の測定値と共に、縄文早期の測定年代が8,000～9,000年B.P.という古い数値を示した。当時は、これが古すぎるとして物議をかもし出した。

黄島貝塚調査に続き、岡山県では児島郡灘崎町(現岡山市南区)の彦崎貝塚の調査を、東京大学人類学研究室が行った。1948年の秋に試掘、翌49年夏に本調査だった。中心となった酒詰仲男氏の夫人の実家が近かったことの縁での調査だった。本調査のときは人類学教室の研究者数人が参加したが、岡山県南の二・三の高校の生徒たちも手伝った。それは、そのころ全国的に流行の動向だった。

彦崎貝塚発掘に参加した生徒たちが連絡を取り合つて、岡山県学生考古学会を作り、彦崎貝塚の発掘にほとんど全日参加していた間壁(武田)霞子はその会に加わり、間壁忠彦は1950年早春に同会が小発掘した児島郡甲浦村郡(現岡山市南区)の弥生中期の貝塚を見学した縁で会員となる。同年の春には、浅口郡船穂町涼松貝塚、夏には香川県小豆郡豊島村神子ガ浜遺跡を会として調査、秋には東京大学山内清男先生の児島郡福田町(現倉敷市)福田貝塚発掘があり、会のメン

バーとして兩人共これに参加した。

何の事だかよくは判らないままに、遺跡遺物に直接かかわるようになったのである。発掘で出てくる土器の小片や石器製作時の石屑が、自分たちの先祖の生活の直接の証しであることだけは実感でき、何となく興味が湧いてくるような気持ちになっていた。高校三年生のときであった。

そうした中、地表面に落ちている土器片や石片、貝殻などを採集することで、新しい遺跡の発見もあることを知る。そのころ忠彦は児島郡の東部に住んでいた。古代の吉備児島の一角である。児島は、国生み神話にいう大八洲のなかで淡路島とともに記されている島で、瀬戸内海では大きな島であった。その西北部が近世に入るところから沖積地の拡大で本土と陸続きとなり、近代には児島半島と呼ばれるようになった。

その児島の東岸は、いまま播磨灘の西北岸であり、最初に記した黄島貝塚からは西へ10キロメートル余りの距離である。海岸には黄島・黒島の貝塚の場所とよく似た台地が何か所もある。この児島の東岸の台地を一・二の仲間と踏査すると、次々と押型文土器の小片が採集できる地点が見つかる。1951年ころのことであった。当時の児島郡銚立村番田から胸上村胸上(現玉野市)へかけての地点、番田の弁天崎・銚島・大入崎、胸上の坊子島・波張崎であった。

どの地点も、花崗岩の崩壊土の台地が浸食され、遺物を包含した土壌が流失し、たかだか南北2キロメートルばかりの間に押型文土器の遺跡が集中することは判明したが、残存状況は良くないものであった。その中、波張崎では、台地の先端部に極めて小範囲ながら貝塚の部分が残り、貝の種類は黄島や黒島でみられたと同じヤマトシジミであった。

これは、縄文早期押型文期の汽水域が、牛窓沖の黄島・黒島から西へ更に10キロメートルは広がっていたことの証拠であった。ほんの小さな事が判ただけであるが、新しいことが知られる楽しさに初めて出会ったような気持ちになり、その後考古学の道をたどる入り口の一つだったように思われる。

間壁忠彦 略歴

1932年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954～1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973～2006年	同上館長
1968～1998年	広島大学、1968～1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982～2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006～2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956～2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979～1986年	中国女子短期大学非常勤講師(歴史学)
1985～2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 143

アチャ平遺跡 ～ 新潟県村上市

富樫 秀之

アチャ平遺跡は、県営奥三面ダム建設事業のため発掘調査が行われた19箇所ある奥三面遺跡群のうちの1遺跡である。私は朝日村の職員として本調査が開始された1988(昭和63)年から2001(平成13)年の終了時までの14年間調査・整理に携わることが出来た。アチャ平遺跡は詳細には3段の河岸段丘からなり、下段と上段に縄文時代後期前葉、中段には縄文時代前期の遺跡が立地している。私が担当したのは上段で、1994(平成6)年～1998(平成10)年に現地調査、1999(平成11)年～2001(平成13)年に整理報告書作成を行った。現地調査が出来るのは5月～11月の7ヶ月間で、調査員2名、調査補助員5～7名、作業員30から50名で調査にあたり、冬場は基礎整理を行った。アチャ平遺跡の調査以前にも奥三面遺跡群の縄文遺跡の下ゾリ・下クボ・前田遺跡の調査を経験していたが、調査担当としては初めての遺跡であり、遺跡の規模内容、調査整理期間の長さから最も印象に残る遺跡となった。

遺跡は縄文時代後期前葉を主体とする集落遺跡であり、1987(昭和62)年の確認調査時に、すでに地表面から大形の配石遺構が検出され、新聞では大湯環状列石に匹敵する規模かと採り上げられ注目される遺跡となった。遺跡の場所はかつてはクリ林として利用され、土地の改変が行われず上面の配石もよく残されていた。調査面積は23,500㎡に及び遺跡の主体部は直径約60mの環状集落の形態を呈し、集落の構成は、中心部から外側に向かって配石→掘立柱建物跡→住居跡の順序で放射状に分布し、段丘東側の斜面には廃棄場が形成されていた。主な遺構は配石101基、住居跡45軒(うち敷石住居12軒)、掘立柱建物跡52棟、土坑111基、埋設土器133基などで、遺物は集落部と廃棄場を主体に土器が約14t、他に土製品、石器、石製品を含め大量に出土した。

調査で手間取ったのは石が多いことであった。河岸段丘上の洪水堆積物の礫が多い地盤に配石が築かれているため、段丘礫との見分けに難渋した。地質の研究者からアドバイスをうけ、自分なりに段丘礫と配石を区別しながら写真撮影、実測、石の取り外しと調査を進めた。配石を外し下部を調査すると敷石住居跡が検出される場合もあり、配石→敷石住居跡→竪穴住居跡と3面を調査する場所も出てきた。また、柱穴等の遺構確認面は礫層となるところが多く、調査終了時には一面が礫層の状態となってしまう、見学者にはわかりにくい遺跡の状況となってしまった。また、敷石住居は周辺地域では類例がほとんどなく、

当初の想定に反して日本海側では初となるまとまった事例となり、大規模なものも見つかった。敷居住居を含め住居跡のほとんどは掘り込みのない平地式の形態をとり、出土遺物も少なく時期の決定も難しかった。柱穴は浅いため検出が難しく各住居跡との特定も難しい状況であった。当時は建物の構造まで考える余裕がなく調査していたが、数年後、建築物を見る機会があり、垂木を地面まで下して支柱に加重をかけない構造なのだと後になって気付いた次第である。

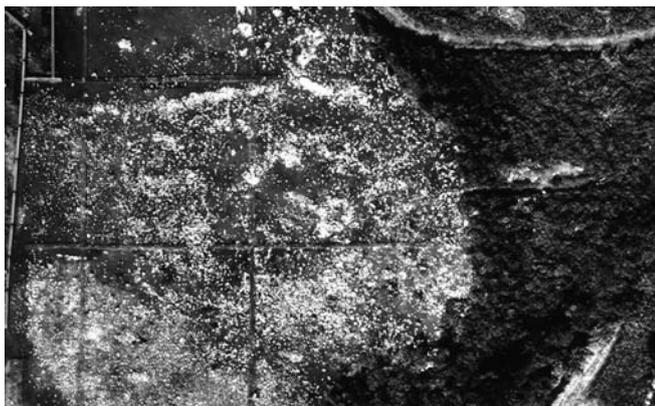
出土遺物で印象深いのは線刻礫で、174点という他に類をみない量が出土した。文様は何を表現したものか、いろいろと推測したり、研究者に意見を聞いたりすることもあった。また、元屋敷遺跡ほどではないが磨製石斧の未成品が1,600点と大量に見つかり、元屋敷遺跡の前段階から磨製石斧の大量生産地であることがわかった。

調査中は新聞報道の効果などもあって、研究者や見学者が多く訪れいろいろな指導助言をいただいた。遺跡に立つと東方向の谷が開け大朝日岳まで見通せる景観から、配石と日の出の関係について関心を寄せる人が多く、夏至に谷の中央付近から日の出があるのではないかと推測し、観察会を計画した。事前の状況確認と写真撮影のため、天気よさそうな日に早朝から日の出を待った。結局、夏至の頃の日の出は谷の中央ではなく、山の中腹付近からだったため、既に周りが明るくなってから太陽が見えるのである。私は周囲が明るくなっていったため、もやで太陽が隠れて見えないのだろうと思い、日の出を確認せず迷惑をかけたこともあった。後日、9月の初め頃に暗闇の中で谷中央付近から昇る日の出を見ることが出来た。

平成11年からは整理作業が本格化し、大学を卒業して間もない情熱のある考古学専攻の調査員が増員された。整理と並行して遺跡展やシンポジウム、現地公開なども開催し、遅くまで作業を続ける日々になった。この奥三面遺跡群の調査は、特に県派遣職員と各地から集まってくれた専門調査員の尽力により終了することができ、地元職員として深く感謝する次第です。

現在、遺跡からの出土品と三面集落の民俗資料を2005(平成17)年に開館した「縄文の里・朝日 奥三面歴史交流館」で展示公開している。展示のほか土器・石器・まが玉作りなどの製作体験や郷土食作り、まつり等イベントを行っており、これからも奥三面に伝わる歴史と文化を伝承していきたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは立木宏明さんです。



▲配石・敷石住居など検出状況(空中写真)



▲環状配石と東方向の谷

考古学者の書棚

「城の内 信州千曲河岸の土師式集落遺跡の研究」

長野県更埴市教育委員会 (1961)

平林 大樹

標記の発掘調査報告書は、筆者もコピーしか所有していない稀少凶書である。「考古学者の書棚」というタイトルに不相応であることを承知の上で紹介するのは、この報告書が長野県の考古学史上、重要な位置を占めるからである。

城ノ内遺跡は、曲流する千曲川右岸の自然堤防中央部に位置する集落遺跡であり、これまで16次にわたる発掘調査が行われている。南側には広大な後背湿地が広がり、通称「屋代たんぼ」と呼ばれる水田域となっている。

発掘調査は、当時の屋代町教育委員会の協力ののもと、東京教育大学文学部の木代修一氏と当地にゆかりのあった岩崎卓也氏を中心に、関東地方の学校教諭、地元の小中学校や高等学校の教諭や生徒が参加した学術調査であった。調査は、昭和32年(1957)から昭和35年(1960)の4ヶ年にわたって実施され、竪穴住居跡18棟や溝状遺構、祭祀遺構などを検出している。

これら1次調査の成果が収録されたのが、報告書『城の内』であり、旧更埴市教育委員会が刊行した、文化財調査報告第1集である。同書において、岩崎卓也氏が提示した第1～6様式編年は、当地における本格的な土器編年研究の嚆矢であった。

氏はその後、長野盆地南部の尾根上に立地する前方後円墳と群集墳の位置関係から、首長権の輪番的移動を想定し、複数の有力集団による複合体が地域社会の政治構造であったことを明らかにしたが、城ノ内遺跡の調査は、そうした地域の古墳時代史を解明するための「第1段階」としての集落調査であった。

そのほか、調査で出土した陶質土器(把手付有脚短頸壺)が、当地と韓半島との関わりを示す半島系遺物の代表例として、度々論及されてきた点も付記しておきたい。

調査にあたり尽力したのが、当時屋代町教育委員会の教育長であった、近藤音三郎氏である。氏は戦前、京城帝国大学図書館に司書として勤務しており、昭和8年(1933)には、雑誌『ドルメン』に、「朝鮮古地図展ところどころ」という論考を発表している。この頃の経験から生じた、「自分の住む郷土の歴史がいつごろ、どのようにして始まったか」(報告書序文)という純粋な学問的動機が、調査を始める原動力になったと考えられる。

屋代地区ではその後も、昭和30年代後半から40年代にかけて、学術調査や緊急調査が次々と実施された。「將軍塚」と呼ばれる前方後円墳や、自然堤防上の集落域、後背湿地の生産域、それぞれの実態が明らかになったのは周知の通りであり、調査成果は下記の報告書にまとめられている。

長野県教育委員会編 1968 『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』

更埴市教育委員会 1969 『生仁』

更埴市教育委員会 1971 『下条・灰塚』

更埴市教育委員会 1973 『長野県 森將軍塚古墳』

これら一連の調査の嚆矢をなす、城ノ内遺跡第1次調査の学史的な価値は極めて高い。にも関わらず、調査地点は長らく不明であった。当時一帯は、桑畑や水田であったため、報告書所載の写真にもランドマークとなる建物が写っておらず、手がかりをつかむことができない状況だったのである。

ところが、平成18年5月、当時の調査地点が明らかになった。

詳細は報告書(千曲市教育委員会2013『屋代遺跡群 城ノ内遺跡9』)に譲るが、千曲市教育委員会が実施した市道拡幅にともなう調査で、広範囲に広がる攪乱土が検出された。その状況確認のためのトレンチを設定したところ、下層から、「1960.8/15 教育大」と墨書きされた河原石が出土したのである。これによって、攪乱土は、過去に調査された住居跡の埋め戻し土であることが確定し、当時の調査地点が明らかになった。

1960年(昭和35年)は、調査の最終年度であり、報告書では同年の調査期間は8月5日～8月16日と記されている。おそらく、4年におよぶ調査の最後に、調査を記念する意味合いを込めて現場に遺したものと推察されよう。

屋代の地で最初の発掘調査が実施されてから、60年が経とうとしている。

この間、上信越自動車道や新幹線の建設にともない、設定された「長大なトレンチ」は、土地に刻まれた歴史を次々と明らかにしてきた。なかでも、国府木簡の出土をなど埴科郡衙にかかわる数々の発見は、古代史研究に大きな成果をもたらした。一方で、情報量の膨大さゆえに、成果を咀嚼しきれていないようにも感じる。大規模な発掘調査が減少した今、個別の成果を総合する作業をすすめる時期に来ているように思う。

長野県更級郡上山田町(現在の千曲市上山田)のりんご農家に育った筆者は、小学生の頃、歴史が好きだった祖父に連れられ、完成したばかりの森將軍塚古墳や、長野県立歴史館に足を運んだ。当時の更埴一帯は、学問的な熱気につつまれており、連日報じられた木簡発見のニュースもおぼろげながら記憶している。考古学、とりわけ古墳への関心を強めていったのがこの頃だが、上山田小学校の廊下に、森嶋稔氏が調査に関わった御屋敷遺跡などの出土資料などが展示されていたことも拍車をかけた。高校、大学では弓道に没頭し、優秀な学生ではなかったが、これがきっかけとなり、古墳時代の鉄鏃について色々調べている。

現在、千曲市教育委員会で、埋蔵文化財の保護業務に従事しているが、先人が残した地域の文化財をどのように守り、次の世代に継承していくのか、自問する日々が続いている。

近年では、古墳の出土遺物を中心に、すでに報告書が刊行された考古資料について再整理をおこなう試みが各地で進んでおり、筆者もそうした作業に取り組んでいる。過去の調査成果を再評価する試みは、かつて調査に汗を流した研究者や地元住民の志を、現在の視点から将来の研究の発展へつなげていく後進の責務であろう。

奥から発掘調査報告書、陶質土器、教育大と書かれた河原石。▶
筆者撮影



アルカ通信 No.150

発行日 2016年3月1日
企画 角張淳一(故人)
発行 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp